

論文の内容の要旨

論文題目 明治・清末の哲学言説と「批評」——井上哲次郎、大西祝、章炳麟

氏名 郭 馳洋

本論文は明治中後期の日本と清代末期の中国における哲学言説、とりわけ井上哲次郎（1856－1944）、大西祝（1864－1900）、章炳麟（1869－1936）の言説を「批評」（＝「批判」）という問題機制において考察する。ここでの「批評」は大きく二つの視座に結びついている。一つは東アジア近代の哲学を、西洋哲学受容のレベルと基準とした狭義の哲学史あるいは西田哲学・京都学派を頂点とした「日本哲学」の文脈において見るのではなく、哲学を言説（discourse）と捉え直し、その批評性つまりアクチュアリティを問うことである。もう一つは「批評」という概念自体が形成された明治中期の批評論を、直ちに文芸批評と結びつけず、むしろ同時代の哲学言説との連関において把握することである。「批評」が criticism の訳語として言論界で定着したのは1880年代後半であり、それを初めて原理的に論じたのは大西祝である。そこで本論文の課題は、「近代」という存在拘束性を念頭に置きつつ、テキストにおける概念と論理の分析を通じて、「批評」を軸に展開した大西の思想と、同じ言説的磁場にあったアカデミー哲学とくに井上哲次郎の現象即實在論について、その批評性を検討すること、そして明治日本の学知を多く摂取した章炳麟の哲学について受容史・交流史研究の知見を踏まえつつ、さらに一歩進んで明治哲学との構造的類似と差異を追究することにほかならない。このように「批評」概念を梃子に、従来の明治哲学史・批評史と区別される新しい語り方の提示を試みる。

本論文の構成として、序章と終章を除くと、三つの部分（全九章）からなっている。第一、二章は第一部で、第三、四、五、六章は第二部で、第七、八、九章は第三部である。以下、各章の内容を紹介していく。

第一章は井上哲次郎の現象即實在論と倫理的宗教観に焦点をあててその批評性の様相と限界を考察する。急速な近代化による不安を取り払う「安心立命」を希求しつつも、超越性を志向するキリスト教に対して此岸性、世俗性を保とうとした井上は、世界を分別可能な現象＝「差別」と不可知な實在＝「平等」に分けながら、両者はあくまで同体不離だとする。そして哲学も宗教も同一の「實在」に関する表象として把握される。そこでは宗教批判的な思考が働き、宗教の単独性・神秘性が削ぎ落され、諸宗教・諸哲学は「實在」の表象として同じ平面に配置されている。個々人は言語的認識ではなくそれぞれの内面にある「大我の声」を介して實在にアプローチするが、實在それ自体は表象・批評不可能なものである以上、その位置をいかに補填するかは言説の政治的効果を左右することになる。

第二章は井上の大我小我論とその政治思想、社会観を分析することで、哲学言説における共同性の位相を明らかにして、大我小我論の東アジア的な広がりをも視野に入れる。現象即實在論は個体を現象と捉えたうえで、個体化の原理を批判することで、大我小我論を析出する。それがやがて祖先崇拜の思想とそれに基づいた良心論につながる。一方で「現象即實在」「差別即平等」は井上にとって「社会」を記述するためのフレームワークでもあるが、そこでは現実的物質的レベルにおける「平等」の実現が反対されながらも、身体という「非我」に対する内面の「真我」の平等が強調されている。この逆説は自由競争に走った個人主義を批判した井上は資本主義そのものの批判者ではなかったことを意味している。なお、大我小我論は井上の教え子であった姉崎正治の議論にも見られた。また「大我」「小我」という対概念を井上から受容した梁啓超は、カント、仏教、宋明学を比較しながら万物一体論を説いた。

第三章は大西祝の批評論と倫理学（とりわけ良心論およびその根底にある哲学）との内的連関を注目し、大西の思想における「批評」という原理がいかに展開するかを論じる。批評に対する大西の関心は、1880年代後半の商業出版の盛況と批評という新しい言論様式の流行を背景としたが、当時の「批評論」（1888年）にすでに理想主義（idealism）の影響が窺える。大西の提示した「同情」と「最高の標準」という批評の両側面は彼の倫理学における存在と当為、事実と理想という問題系につながり、そこから良心の起源というテーマが浮上する。主著の『良心起原論』ではあらゆる外的権威を批評しうる良心それ自体を基礎づけるために、一種の仮定・要請としての目的論哲学が提起されている。その論述には漢文脈の「復性」概念に通じる表現も見られる。附論では大西の目的論的良心論における「性」という概念がどのように文芸理論としての「同情」論に結び付くかを分析する。

第四章は「批評」の先鋭的な表れとして大西の忠孝論と国家観を分析し、目的論哲学との関連にも言及する。教育勅語（1890年）の発布に伴って道德をめぐる言論のせめぎ合いが起きていたなか、大西は当時の支配的な勅語解釈に対して、「忠孝」が道德の基礎原理になる可能性を明確に否定した。ただし、その緻密な議論は忠孝自体に対する単純な肯定でも否定でもなく、忠孝という言葉の意味を決定不可能性へ差し戻すものであった。この論法は「忠君愛国」というテーゼへの批判にも引き継がれる。一方で大西は目的論哲学に依拠して国家を「目的」を実現するための「倫理的機関」と位置づけたが、これはいわゆる「中性国家」と異なる国家像といえる。

第五章は大西における広い意味での「制度」と目的論哲学について考察する。大西の制度論は表象＝代表という政治哲学的な主題を内包し、制度にアプリオリに内在する代表不可能性を突き出したものである。こうした性格は翻って批評の可能性となり、法と良心の緊張関係および革命観、「制度」と「理想」の弁証法的な関係に反映され、その前提として目的論的な自然観・活物観がある。こうした制度論は言語一般の批評に通じる。大西は言語フェティシズムを批判し、真理の表象不可能性を主張するが、この議論はさらに宗教論へ向かう。宗教批判、自由神学およびユニテリアンに触れた大西は宗教問題を言語問題に転換し、名称への執着を批判した。そこに宗教も含めた社会組織への批評意識が込められている。それは「社会的キリスト教」に通じた大西の社会主義論に鮮明に現れている。附論では大西の美学論における「遊離」という概念とその展開を考察し、そこに伏在している「生存競争」への批判意識を炙り出す。

第六章は明治以降とりわけ 1920 年代後半から 1930 年代半ばまでの日本における「批評」原理論の行方に目を向け、アカデミズムの哲学科出身でありながら、批評を原理的に論じた戸坂潤の批評論を中心に考察する。明治後期から大正期にかけて文明批評・文化主義という思潮が形成される。マルクス主義者として知られる戸坂潤は、実はそういった流れをも批判的に受け継いだ。戸坂は批評を「アカデミズムとジャーナリズム」という構図と結びつけ、批評のアクチュアリティを説くことで、狭義の文芸批評を批判し、「可能的制作」としての批評と「科学的批評」を提唱した。さらに認識論の観点から、批評を物事の印象を言葉に翻訳する営為と捉え直し、批評に内在する普遍化の力を引き出そうとした。

第七章は桑木厳翼の「荀子の論理説」(1898 年)を手がかりに、章炳麟の荀子解釈を考察する。桑木の荀子論は『荀子』正名篇に一種の概念形成論を読み込んだもので、それが章にも読まれた。章炳麟は『国故論衡』で唯識論を用いながら『荀子』の正名篇と解蔽篇を認識論・概念論的に解釈した。その解釈では、正名篇の「天官」は唯識論の「六識」に対応しつつも、天官の一つである「心」は「意識」のみならず「臧識」(阿頼耶識)をも意味している。心が五官を引率して「名」を形成するが、名によって認識されるのは差異的な「理」であって無差異的な「道」ではない。しかし心は同時に阿頼耶識であるため、道を了解する可能性が残される。道と名・理との距離は心で構造化され、批評を可能にする。

第八章は井上哲次郎の哲学・宗教論との関連を補助線としつつ、宗教に対する章炳麟の批判的省察を論じる。外的権威を相対化して批判するのも批評の役目だとすれば、章の場合、それは端的に宗教批判という形で現れている。合理主義的な立場をとった章は中国思想史から無神論の系譜を描き出し、信仰対象としての神を措定する「惟神論」を批判する。その批判はやがて言語論つまり世界の言語的表象の問題に行き着くが、章はそこで「識」に依拠する宗教の樹立を提唱する。諸哲学・諸宗教を同じ平面で配置する概念装置の使用、宗教の合理的な把握、宗教の倫理化(道徳を重視)という点で章と井上は共通しているが、内面の大我との合一を説く井上の修養論的な主張と異なって、章にとって道徳は革命の実践においてはじめて完成する。

第九章は章炳麟における「名」の問題とりわけ言語一本体論を分析することによって、章における「批評」の構造をさらに解明する。章は諸宗教における「神」を批判できても、「本体」だ

けを批判できなかった。それどころか、本体は章にとって崇拜対象を独断的に措定した様々なイデオロギーを相対化する方法論的な概念でもあり、まさしく「批評」の根拠である。章の宗教論からは本体の言語的表象という問題が引き出される。本体の表象不可能性を自覚した章は「以名遣名」という方法で言語の限界と「識」の存在を論証しようとした。章の議論では信仰対象である「神」も自足的な本質をもつ「物」も否定されているが、こうした言語と本体（名と道）の分離はかえって「名」の解放につながる。言語の世界を不可避免的に与えられた主体にとって、本体とは何かしらの実体ではなく、むしろ言語と本体が分離・分裂するという感覚として、言葉によって張り巡らされている象徴的秩序に対する批評的な態度として浮かんでくるのである。